

見開き2ページでわかる！

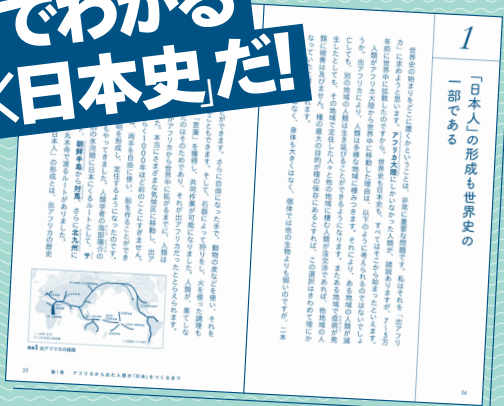
# 「世界史×日本史」

## エピソード1000

玉木俊明

これが  
2ページでわかる  
「世界史×日本史」だ!

\*この本は、  
世界史と日本史の  
つながりに  
注目した新しい  
歴史入門書です。





見開き2ページでわかる！「世界史×日本史」エピソード100

玉木俊明

星海社

189



中川さつきさんにささげる

2022年度から、歴史総合という教科が高校の必修科目になります。これは、世界史と日本史を融合させた教科です。もう少し詳しくいうなら、「世界史と日本史を融合し、これまで学習不足が目立っていた近現代分野を中心に学ぶ」ことを目的にしています。

本書は、この考え方に刺激を受け、私自身の観点から歴史総合を書いた書物です。

読者の中には、近現代史が中心ではないという印象をお持ちの方がいらっしゃるかもしれませんが、近世を近現代史の一部に含めたなら、およそ75パーセントが近現代史のことを書いています。

また、近現代史を知るためには、ある程度は古代を知らなければなりませんし、そもそも人類とは何かを知らずして、近現代史だけであったとしても、語ることは不可能だと思います。

本書は、見開き2ページで一つの話題を提供し、全部で100のテーマを扱っています。

必ず、日本との関係に言及しています。日本史は、世界史の一部なのです。ではつぎに、本書の内容をまとめてみましょう。本書の大まかな内容が、それでおわかりいただけると期待します。

第1章は、「アフリカから出た人類が『日本』をつくるまで」というタイトルです。

1969年7月20日に、アポロ11号の阿姆斯特朗船長が人類史上初めて月面に降り立ったとき、「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である」と言ったことは、広く知られています。

この言葉を使用するなら、今から7万〜5万年前にアフリカ出身の一人の無名のホモ・サピエンスのアフリカ外世界への一歩は、おそらく阿姆斯特朗船長の月面への一歩以上に、人類にとっての大きな一歩だったはずですよ。

われわれの歴史は、この一歩から始まったのです。

人類は、さまざまな地域へと移動します。やがて人類は定住し、六大文明を形成しました。六大文明の形成過程は出アフリカの一部であり、日本列島に人々が棲み着く過程も、日本でコメが栽培さいばいされるようになったことも、出アフリカの一つの過程としてとらえられ

ます。とすれば、日本史は、出アフリカから始まったともいえるでしょう。

第2章の「中国の影響下で育った古代日本」では、六大文明の中で急速に経済を発展させた中国に焦点を当て、おもに中国との関係で日本史を論じています。

中国では、始皇帝しこうていにより度量衡どりょうこうや文字が統一され、現在の水準で判断するならあまり大したことがないとはいえ、単一市場の形成に成功しました。その後も中国は、どんどん中央集権化を進めて国家が経済に介入します。それが、古代中国が他の地域よりも高い経済成長率を実現できた理由だと考えられます。日本が取り入れた中国の律令りつりょう制度は、その結果として生まれたものであり、おそらく日本人は、そのようなことに気づいていなかったと思われます。それが、日本に律令制度が根付かなかった大きな原因です。

やがて中国は、宋の時代にさらに大きな経済成長を遂げ、宋の銅銭はアジアのユーロともいべき存在になります。日本を含め、アジアでは、緩やかな商業統合が果たされたのです。

第3章では、ヨーロッパの反撃が書かれます。そのタイトルは、「ヨーロッパのアジア進

出と日本の海禁政策」です。それまで劣勢にあったヨーロッパが、攻勢に転じたのです。

中世のヨーロッパは、他地域との交流が盛んではありませんでした。アジアとの貿易に際してもヨーロッパ人が自ら赴くことはなく、アジア人の手でエジプトのアレクサンドリアまで輸送された東南アジアの香辛料を、ヨーロッパ内部で流通させていた、というのがその例です。ですが、ポルトガル人のヴァスコ・ダ・ガマがインド航路を発見して以来、ヨーロッパ人がヨーロッパの船でアジアに進出するようになります。

進出するヨーロッパと内にとどまるアジア。それがこの二地域の大きな違いでした。それが、以後のヨーロッパとアジアの大きな差を生み出すことになったのです。同時代のアジアでは海禁政策がとられ、貿易を国家が管理することになり、貿易は停滞します。

ヨーロッパの拡大には、多くの商人が参加しました。それには、イベリア半島に住んでいたユダヤ人であるセファルディムも含まれていました。イエズス会の拡大には、ユダヤ人の血をひくコンベルソのネットワークが大きく貢献していました。

近世ヨーロッパの宗教戦争は主権国家誕生のきっかけになりました。戦争を継続していくと、他国を憎む感情が生まれ、自国のナショナリズム高揚へとつながりました。それに対し日本は、国を閉ざすことにより中国からの影響力がなくなり、ヨーロッパとは別の形



でナシヨナリズムが生まれます。

このように、近代国家への歩みという点から、ヨーロッパと日本が対比されます。

第4章の「ヨーロッパのアジア植民地化と日本」でも、近代化しつつあるヨーロッパと日本が対比されます。宗教戦争の余波で、ヨーロッパの国家内で異分子とみなされた人たち（つまり別の宗教や宗派を信じる人々）がヨーロッパ外世界に移住しますが、それでかえってヨーロッパのネットワークは広まり、ヨーロッパの世界支配に寄与することになりました。

ヨーロッパでも、日本でも一般の人々の生活水準は上昇します。しかしヨーロッパが他地域の産品を購入することで生活水準を上げたのに対し、日本ではそれまで輸入していた商品を国内で生産するようになること（すなわち輸入代替により）、生活の質が高まったという違いが見て取れるでしょう。

もともとヨーロッパは経済的にはアジアより劣っていたのですが、科学では進んでいたのです。イエズス会が中国にヨーロッパ科学の成果を輸出します。そうすることで、世界は徐々に「ヨーロッパ化」していったのです。

第5章は、「帝国主義時代と日本」が論じられます。ヨーロッパが世界を植民地化していくときに掲げた言葉は、「文明化の使命」でした。ヨーロッパ人は遅れたアジアやアフリカを文明化することこそ自分たちの使命だと本気で信じ、世界を植民地化していったのです。劣った人々に対し、不平等条約を押しつけることには問題がないと感じていたのでしよう。日本人は、不平等条約の撤廃てっぺいに非常に長い時間をかけて、成功していきました。

帝国主義時代には世界が一体化します。たとえば電信により、情報は世界中にただちに伝えられるようになります。世界の貿易が発展すると、そのための決済が増加し、その多くはロンドンでなされるようになります。世界経済が成長するほどイギリス船、イギリスの保険が使用されます。すると商取引に必要な手数料収入がイギリスに流入することになります。

日本が東アジアに植民地（正確には「植民地」とはいえないかもしれませんが）をもち、帝国を形成し、産業革命に成功したのはそういう時代でした。ですがおそらく、日本人はイギリスが形成したこのようなシステムに気づかなかつたものと思われれます。

第6章の「第一次世界大戦から現代社会への転換と日本」では、第一次世界大戦から現代までの世界と日本の歴史が述べられます。

1920年代にはモダンガールが登場するなど、欧米的な消費社会が形成されつつあった日本ですが、1931年の日中開戦から1945年まで続く十五年戦争によって、消費社会の形成は頓挫とんざします。

1929年にアメリカで発生した不況の影響で、世界経済は大恐慌に陥り、それが原因の一つとなって第二次世界大戦に突入します。この間、日本は、軍事産業の発展により、重化学工業を基軸とする産業構造へと転換します。

第二次世界大戦後、戦後世界は資本主義陣営である西側（アメリカ側）と、社会主義陣営である東側（ソ連側）に分かれます。世界がアメリカ経済の絶対的な大きさに依存し、国際機関をアメリカの繁栄のために利用する国際秩序が築かれますが、1971年のニクソンショックによって瓦解します。

世界の産業構造は消費を中心としたものから金融を中心としたものへと変わります。金融社会と新自由主義の台頭により、所得格差が広がります。

アジアでは、当初は高度経済成長を経験していた日本が、ついで中国が目覚ましい経済

成長を実現しています。中国は、「一带一路」により、ユーラシアの物流の中心になろうとしているのに対し、日本は、「自由で開かれたインド太平洋戦略」により、海を意識した政策を展開しようとしています。

繰り返しますが、日本史は世界史の一部です。本書は、歴史総合という科目を学習する高校生、それを指導する先生方のお役に立つことだけではなく、日本史に対する新しい視点を提供し、多くの読者に、これまでにない歴史の見方を提供したいという思いで書かれています。

イタリアの歴史家クローチエは、「すべての歴史は現代史である」という言葉を残しました。イギリスの歴史家E・H・カーは、「歴史は現代と過去との対話である」と言いました。彼らの発言の趣旨は少しずつ異なるものの、歴史とは、すべて現代から過去をどのように見るのかということであり、歴史家は、現代の視点から絶えず過去を再構成しなければならぬということを語っています。

本書を通じて、私自身が過去をどのようにして再構成したのかということを読者が理解していただけると期待しています。

本書の執筆にあたり、編集者の片倉直弥氏にはひとかたならぬお世話になりました。この場を借りて、御礼申し上げます。

本書の原稿を提出して少したった2021年4月19日、京都産業大学文化学部准教授の中川さつきさんが、病氣療養中のところ、治療の甲斐なく亡くなりました。

私はここ数年、京都産業大学の労働組合の執行委員長をしており、中川さんはその私を献身的にサポートしてくれたばかりか、学外での組合活動に積極的に携わってくれました。そのようないわば同志ともいえる人物が亡くなったことで、私は大きな衝撃を受けました。周りの人たちも同じようなショックを受けています。

中川さん、私たちの組合活動を支えていただき、ありがとうございました。励ましの言葉をかけていただき、ありがとうございました。執行委員会や団体交渉での勇気ある発言、ありがとうございました。面白い話をいっぱいしていただき、ありがとうございました。本書を、中川さつきさんの魂にささげます。それが、私にできる最大の感謝です。これまで本当に、ありがとうございました。

2021年6月 玉木俊明

## 目次

はじめに 3

### 第1章 アフリカから出た人類が「日本」をつくるまで 23

- 1 「日本人」の形成も世界史の一部である 24
- 2 縄文時代は世界の六大文明とは異質なのか 26
- 3 近代日本を苦しめた「人類最大の過ち」あやま 28
- 4 縄文時代の稲作は六大文明とともにあり 30
- 5 世界と日本の思想を決定した枢軸時代すうじく 32
- 6 作られた偽りの「大戦争」——ベルシア戦争と元寇げんこう 34

第2章 中国の影響下で育った古代日本 37

- 7 日本の文字を作った中国の始皇帝しこうてい 38
- 8 日本の国作りの手本になった魏晋ぎしん南北朝時代から隋代ずいの中国 40
- 9 日本の律令制度が失敗したのは中国からうまく学べなかったから？ 42
- 10 中国に習った古代日本の行政システム「律令制」はどのように崩壊したのか 44
- 11 聖徳太子しょうとくたいしの遣隋使による日中交流がすぐ破綻した理由 46
- 12 グローバル帝国・唐から最新の国家システムを学んだ平安時代の日本 48
- 13 貞観じょうがんの治と玄奘げんじょうがつくった日本の仏教 50
- 14 日本、ウイグルなど外に向けて開かれたゆえに滅んだ唐 52
- 15 宋代の「アジア版ユーロ」が生み出した世界最初の高度経済成長 54

16 日本は元寇でモンゴルに勝利したが、経済システムでは元よりずっと遅れていた 56

17 遊牧民でつながる世界史 ゲルマン民族の大移動と日英比較 58

18 国風文化の誕生 『源氏物語』は世界史から見てどれほどすごかったのか 60

19 ヴァイキングも倭寇も偉大な商人だった 62

20 足利義満の朝貢貿易は中国だけでなくアジア全体とつながっていた 64

21 アフリカまでつながる足利義満の日明貿易 東南アジア、インド洋、アフリカ沿岸の海上交易 66

22 アジアの海洋ネットワークの要だった琉球 68

23 南北戦争と応仁おうにんの乱の共通点 「内乱」が新しい国の構造を作る 70

### 第3章 ヨーロッパのアジア進出と日本の海禁政策 73

24 ポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマが変えたアジアの風景 74



- 25 海運業の意義を理解したからできたヨーロッパと日本の経済発展 76
- 26 日本も組み込まれた世界的経済システム コロンブスの不平等交換 78
- 27 戦国時代の日本にまで!? 世界中に広がった亡命ユダヤ人のネットワーク 80
- 28 スペインとポルトガルの「世界分割」が導いたポルトガル人の来日 82
- 29 三位一体によって混乱したキリスト教の教義は、日本への布教に役立った!? 84
- 30 「死の商人」として軍事革命をアジアにもたらした宗教組織イエズス会 86
- 31 鉄砲伝来やザビエル来日より古い西日本大名の外国貿易 88
- 32 イエズス会とユダヤ人 日本にやってきたキリスト教徒の秘密 90
- 33 なぜ西国の戦国大名は天下統一を図らなかったのか 92
- 34 豊臣秀吉がイエズス会を追放したのはなぜか? 94
- 35 なぜ秀吉は朝鮮出兵に踏み切ったのか 96
- 36 ヨーロッパとは異なる、信長・秀吉・家康の近代国家システム 98

ヨーロッパのアジア植民地化と日本

- 37 太閤検地と刀狩りがつくった江戸時代の官僚制度 100
- 38 本国の衰退をもとめず、日本にやってきたポルトガルの新キリスト教徒ニュークリスチャン 102
- 39 小氷期しょうひょうきの不作が生んだ大航海時代と、小氷期でも海禁できた豊かな日本 104
- 40 海禁が導いた日本経済の大転換 106
- 41 じつは重要な日本と中国の海禁の違い 108
- 42 世界の異文化交流の中心だった近世アジア 110
- 43 中国の海禁政策と日本ナショナリズムの高揚 112
- 44 朝鮮通信使・オランダ風説書 情報をうまく使った江戸幕府 114
- 45 スレイマン1世はなぜ過大評価されるのか ヨーロッパでの勝利とアジアでの敗北 116
- 46 アジアの東西で交換された銀と絹 118

- 47 日本でもヨーロッパでも、近代国家をつくったのは戦争だった 122
- 48 宗教迫害のおかげで経済発展したヨーロッパと、その逆だったアジア 124
- 49 じつは大切でなかったオランダ東インド会社と、本当のオランダの利益源 126
- 50 近世日本の経済政策に欠けていたのは「対外戦略」だった 128
- 51 一般のイメージとは違い、豊かになっていった江戸時代の庶民 130
- 52 じつは大きい江戸と近世ヨーロッパの消費社会の違い 132
- 53 なりたちが大きく異なるイギリスと日本のナショナリズム 134
- 54 数量化で政敵に勝利したイギリスと、それができなかった日本の違いとは 136
- 55 イギリスがフランスに勝てた理由も、江戸時代の経済成長の理由も「消費税」 138
- 56 イギリスは特殊な近代国家だった 日本が見逃していた三つの例外性 140
- 57 クロムウェルが近代イギリスをつくった そして日本も!? 142
- 58 日本・ロシアの海上政策の違い ロシアの「西ヨーロッパとの窓」の変化とイギリスの発展 144

帝国主義時代と日本

159

59 日本とは違うニッチなスウェーデンの生存戦略 146

60 「中国のヨーロッパ化」の象徴・ネルチンスク条約とその後の中国の非ヨーロッパ化 148

61 「中立」という、アジアにはない思想のおかげで発展したヨーロッパ 150

62 ヨーロッパが中国に、そして日本に輸出した科学 152

63 アヘン戦争のイメージと日本の外交方針転換 154

64 日本にきたロシア人使節・ラクスマンの正体から知るフィンランド人の運命 156

65 アメリカの黒船が日本に伝えた帝国主義 160

66 ナポレオンの勝利に貢献した腕木通信を、日本はどうとらえたか 162

67 世界の情報通信スピードを変えた電信 164

68 風土病だったコレラがパンデミックになったのはなぜか 166

69 ガス灯・水道が変えた世界の都市風景 168

70 帝国主義時代を支えたヨーロッパ人の意識と、日本人の感覚の違い 170

71 明治日本の手本になったプロイセンの大きな欠陥とは？ 172

72 19世紀、イタリア・ドイツの統一と日本の統一はどう違ったのか 174

73 イギリスで排除されたスコットランド人が育てた明治日本 176

74 手数料資本主義で世界を制したイギリスとそれが理解できなかった日本 178

75 ニッチをついたから実現できた日本の遅れた産業革命 180

76 世界を変えた第二次産業革命に置いていかれた明治日本 182

77 日本にとっては大事件だった日清戦争も、列強にとっては小さい事件 184

78 日本にとっても世界にとっても大事件だった日露戦争 186

79 欧米列強との不平等条約改正に尽力した明治政府 188

第6章

第一次世界大戦から現代社会への転換と日本

197

80 アジア域内交易と日本 海運業がつかない日本・アジア・ヨーロッパ 190

81 「欧州大戦」にすぎなかった第一次世界大戦 置いていかれた日本 192

82 ヨーロッパを変えた三回の大戦争は日本をどう変えたのか 194

83 日本とヨーロッパの帝国主義の違いが決めた太平洋戦争の勝敗 198

84 世界情勢を象徴するモダンガールの出現と消滅 200

85 世界を揺るがした大恐慌が生んだ、「大学は出たけれど」といわれた戦前の就職難 202

86 十五年戦争と産業 戦争による日本の大変化 204

87 経済成長のきっかけとなった朝鮮戦争 日本とヨーロッパの共通体験 206

88 全世界を巻き込んだ冷戦 208

- 89 高度経済成長の世界史 210
- 90 社会主義の恐怖がつくったEU 212
- 91 世界中のインテリが社会主義に憧れた時代 214
- 92 社会保障制度の成立が早いイギリスと遅い日本、その差を生んだのは家族制度 216
- 93 日本のソフトパワーの立役者・手塚治虫 218
- 94 アメリカが支配した戦後世界経済と、その終焉の理由 220
- 95 日本も追随したイギリスの「金融自由化」が生み出した格差社会 222
- 96 現代に残る帝国主義の負の遺産、難民問題 224
- 97 ブラッドダイヤモンドが表すアフリカの悲劇 226
- 98 最新のグローバルIT企業と日本企業の産業構造の違い 228
- 99 タックスヘイブンが象徴する、日本とイギリスの帝国主義の差異 230
- 100 「一带一路」と「自由で開かれたインド太平洋戦略」 日中の現代外交戦略 232





第1章

アフリカから出た人類が

「日本」をつくるまで

# 1

## 「日本人」の形成も世界史の一部である

世界史の始まりをどこに置くかということとは、非常に重要な問題です。私はそれを「出アフリカ」に求めようと思います。アフリカ大陸にしかないなかった人類が、諸説ありますが、7万〜5万年前に世界中に拡散したのですから。世界史も日本史も、すべてはそこから始まったといえます。

人類がアフリカ大陸から世界中に移動した理由は、以下のように考えられるのではないでしょう。出アフリカにより、人類は多様な地域に棲みつきまします。それにより、ある地域の人類が滅亡しても、別の地域の人類は生き延びることができるようになります。またある地域で疫病えきびょうが発生したとしても、その地域で定住した人々と他の地域に棲む人類が没交渉であれば、他地域の人類に被害は及びません。種の最大の目的が種の保存にあるとすれば、この選択はきわめて理にかなっていたと考えられます。

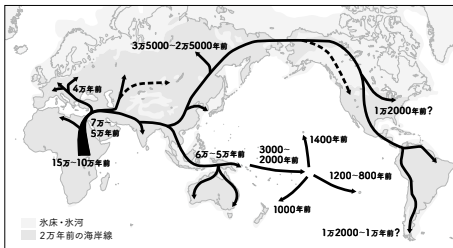
人類は、足は速くはなく、身体も大きくはなく、個体では他の生物よりも弱いのですが、二本

足で長距離を移動することができません。さらに自由になった手で、動物の皮などを使い、それを着ることで、寒さに耐えることもできます。そして、石器によって狩りをし、火を使った調理もできました。さらに人類は「言葉」を獲得し、共同作業が可能になりました。人類が果てしなく続く旅に出ることができたのはそのためであり、それが出アフリカだったととらえられます。

図表1にあるように、人類がアフリカから世界中に拡がるまでに、かなりの年月を必要としました。本当にさまざまな気候区に移動し、出アフリカが終わったのは、おそらく1000年ほど前のことにすぎません。太平洋の諸島に移住できたのは、両手を自由に使い、船をつくることができたからです。その間に人類は文明を形成し、定住するようになったのです。

人類は、もちろん日本列島にもやってきました。人類学者の海部陽介かいひ ようすけの研究によれば、3万8000年前の氷河期に日本にくるルートとして、サハリンから北海道への陸上ルート、朝鮮半島から対馬、さらに北九州に至るルート、台湾から与那国島よなぐにじまに丸木舟で渡るルートがありました。

したがって世界的にみれば、「日本人」の形成とは、出アフリカの歴史の一部なのです。



図表1 出アフリカの経路

# 2

## 縄文時代は世界の六大文明とは 異質なのか

文明とは定住者によって築かれる。これは、長年にわたって人々のあいだに染みついている考え方です。しかし、それが正しいかどうかは疑問です。というのも、太平洋に散らばる諸島間に文明がなかったと言い切ることにはできないからです。これは、陸地を中心としてみた歴史観の弊害かもしれません。ここでは、縄文時代をどうとらえるべきか、少し考えてみましょう。

昔は、世界にはメソポタミア、エジプト、インダス、黄河の四大文明があったとされます。現在ではそれに長江（揚子江）と古代アメリカの二つの文明を加えて、「六大文明」というのが一般的です。

六大文明は、確かに定住者が形成した文明です。しかし人々はそれぞれの文明に閉じこもっていたわけではありません。たとえばメソポタミア文明とエジプト文明のあいだには交易があり、やがて二つの文明は一体化して「オリエント」と呼ばれるようになります。そしてオリエントと

インダス文明のあいだにも交易関係がありました。

定住者が生み出した文明圏を結ぶ、移動する人々がいました。移動する人々がいなければ、文明の伝播はありません。したがって定住民と移住民は表裏一体、すなわち相互依存関係にあったというべきでしょう。

出アフリカによって世界中に移動した人類は、世界各地に定住し、いくつかの文明を築きました。そして定住せず移動を続ける人類もいて、彼らが定住者の文明を結びつけていったと考えられるのです。世界の文明はそうにして発展し、相互依存関係を強めていったといえるでしょう。

人類が**日本**へ定住したのも、そのような過程の一部として考えられます。**東南アジア**や**北アジア**、**台湾**からきた人々が、日本に棲みつきました。縄文時代です。縄文時代とは今から16000〜3000年ほど前の時代で、定住者のもたらした文化の影響を受け、植物が栽培されていたといわれています。

また、その痕跡が日本列島各地にあるということは、縄文文化もまた、定住者だけではなく移動する人々によって築かれたという証拠です。日本の文化も、定住と移動の相互依存という、六大明の形成と同じ過程をたどったといえるのです。

# 3

## 近代日本を苦しめた

### 「人類最大の過ち」あやま

ジャレド・ダイヤモンドという歴史家は、定住生活こそ「人類最大の過ちである」と断言しています。日本が国民病として苦しめられた「結核」も、定住がなければ存在しませんでした。

かつて、狩猟採集による生活水準は定住に比べて低く、平均寿命は短いと考えられていました。狩猟採集による生活では食料を計画的に育てることはできず、貯蔵されるものは少なく、毎日新しい食料を見つけて飢えをしのがなければいけないはずだからです。逆に、定住して農耕を始め、品種改良をした植物を栽培したなら、たくさんのお食料がとれ、飢えから逃れられると考えられていました。ですが、近年それが間違いであることがわかってきたのです。

考古学の遺跡調査がそれを物語っています。ギリシアとトルコで発見された骨格標本を見ると、氷河期末期の1万年前の狩猟採集民の平均身長は、男性が5・9フィート、女性が5・5フィートでした。しかし、約1万年前に世界中で植物の栽培と動物の家畜化が始まった後の、紀元前

3000年の農民は、それぞれ5・3フィートと5フィートでした。ここからわかるように狩猟採集民の方が身長が高く、栄養状態が良かったのです。

農業社会では食料が備蓄され、持つ者と持たざる者のあいだに大きな差ができるようになりました。

さらに農業の問題点として、以下の三点があげられます。第一に初期の農民が入手できる食料は一種類か二種類にかぎられていたうえにカロリー数が少なかったため、栄養状態は良くなかったという点。第二に、非常にかぎられた数の作物に依存していたため、作物が育たなかったら、たちまち飢餓に見舞われる危険性があった点。第三に、農業によって人々が密集して住むようになり、その多くが他地域の人々と商品を交換したので、寄生虫や伝染病が広まった点。

じつは、結核と下痢げりは農業が発生するまでは存在せず、はしかと腺ペストは、大都市が生まれるまでは発生しなかったのです。人間が移動することによって、病原菌やウイルスが撒き散らされ、人類は疫病に悩まされるようになりました。言い換えると、出アフリカとは世界中に病気が拡散する過程でもあったのです。

日本では、長年にわたって結核が国民病であり、多数の若者が亡くなりました。それは人類が定住生活を選んだ結果といっても過言ではありません。

## 縄文時代の稲作は 六大文明とともにあり

世界中で栽培されている農作物は、元来は野生種でした。それに対して人間が品種改良を重ねてきたのが、農耕に向けた栽培作物です。

六大文明で栽培されていた主要作物をあげると、メソポタミア文明が麦類、エジプト文明が小麦、インダス文明が麦類、黄河文明が小麦やアワ・キビ、長江文明がコメ、古代アメリカ文明がジャガイモとトウモロコシです。

さて、日本人の主食といえ、やはりコメです。現在の研究では、稲作の起源は、インドのアッサム地方から中国の雲南省にかけての山間部にあったようです。日本には、長江ないし朝鮮半島から、縄文時代の終期に稲作が伝わったとされます。

コメが伝わったルートについて、もう少し細かく述べてみましょう。

現在では、前6000〜前5000年頃にすでに長江流域に文明があったことがわかっていま



す。長江文明は、畑作中心の黄河文明とは違い、稲作中心でした。これが、日本にとって大きな影響を及ぼすこととなります。

まず中国から稲作が伝わったのは東南アジアです。東南アジアでは、前4000年頃から稲作が開始されました。この頃までには長江中下流域と亜熱帯の中国東南部で文化的な接触があり、中国東南部からベトナムへと稲作が導入されました。

前2000年紀〜前1000年紀初頭には、稲作は東南アジアの諸島部にまで広まったと思われます。稲作の伝播には、稲作の方法を知る人々の移動が必要ですから、人的交流を通じて、稲作にかぎらず、東南アジアは中国の大きな影響を受けていました。

この稲作が、やがて日本に伝わったものと思われれます。直接的な経路には、朝鮮半島、長江、台湾などが考えられます。

いずれにせよ稲作の技術をもって日本に定住した人々は、日本を稲作地帯に変えていきました。技術は、人とともに移動します。この点で日本は、東南アジアと同じく文化的にも中国の影響を受けるという経験をしたことでしょう。

日本人は、日本への稲作の伝来にしか興味をもっていないように思われますが、このように稲作のたどった道を探ることで、新しい世界の見え方が見つかるかもしれません。

## 世界と日本の思想を決定した 枢軸時代すうじく

著名な哲学者ヤスパースは、人類が思想的に大きく成長した紀元前500年頃を「枢軸時代」と呼びました。それは、はるか今の日本の思想にまで影響を及ぼしています。

ヤスパースはこう言います。「この頃に」人類をして今日あらしめている精神的基盤が築かれたのであります。それは中国、インド、ペルシア、パレスチナ、ギリシアにおいて、時を同じくしてではあるが、それぞれ孤立して、できたのであります」（ヤスパース著・草薙正夫訳『哲学入門』新潮文庫）。

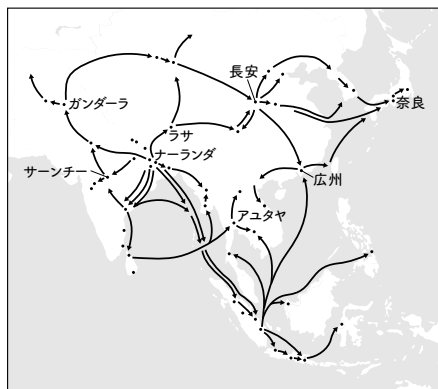
この前500年頃、中国には孔子と老子が生まれ、さらに墨子、莊子、列子などの中国哲学における重要な思想家が現れました。インドではウパニシャッド哲学が誕生し、釈迦が仏教を創出し、中国と同様、懷疑主義と唯物論、詭弁派と虚無主義に至るまでの哲学が出現しました。そして、イランではゾロアスター教が現れます。ゾロアスター教は今ではあまり知られていませんが、終末論や善悪二元論を説き、ユダヤ教やキリスト教に多大な影響を与えました。

そしてパレスチナでは、「バビロン捕囚」という民族的な苦難を契機とし、ユダヤ人としての民族意識が強くなり、ユダヤ教の体系が築かれます。ユダヤ教に大きな影響を受けて、後に世界三大宗教であるキリスト教とイスラーム教が成立することは周知の事実です。

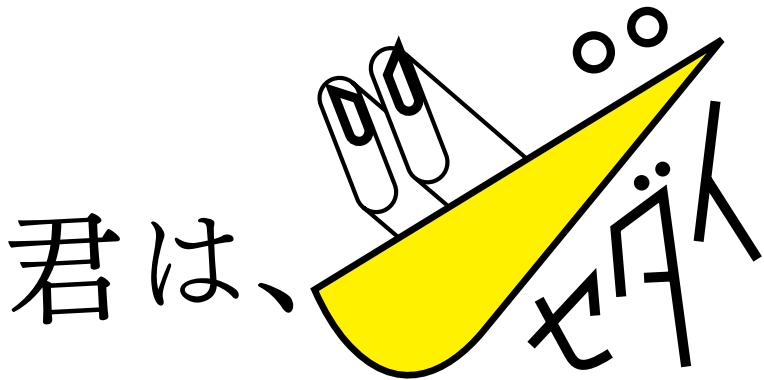
またギリシアでは、詩人のホメロス、哲学者のソクラテス、プラトン、歴史家のヘロドトス、ツウキュデイデース、数学者のピタゴラスらが活躍します。

このように、おおむね前500年頃に、世界の思想を決定づける人々が各地で生まれました。この頃に人類の思想の大枠は決まったといっています。

日本には、**図表2**のようなルートを経て、6世紀に仏教が伝来します。日本は、6世紀に枢軸時代の影響を大きく受けたといえるでしょう。さらに16世紀にはキリスト教が伝来し、日本は再び枢軸時代の大きな影響を受けることになるのです。



図表2 仏教の伝来ルート



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**